



【10月23日（土）、24日（日）第56回全国学童保育研究集会開催】

コロナウィルス感染拡大防止の為、オンライン開催になりました第56回全国学童保育研究集会に参加された指導員の感想を含めた提出レポートを一部ではありますがご紹介します。

【吉川 美里（なかよしくラブ 常勤専任指導員）】

新型コロナウイルスによるパンデミックの中での学童保育。予想以上に長く、繰り返される毎日を通り過ぎてきましたが、前例のないことへ立ち向かう難しさを感じます。学童保育そのものも前例のない課題が多い世界であるとずっと感じてきました。学童保育所発足・きっかけとなったところから、今までの歴史を学ぶことにより、関わってきたすべての人が“学童保育を少しでも良くしていこう、子どもたちや未来のために”という思いで行動してきたように思いました。今自分にはどんなことができるだろうかを考えていきたいと思えます。

今回の研究集会で受講者が一番多い分科会だったようで、早めに受け付けして下さいと事前にお知らせが来るほどの700名くらいの大人気講座でした。理由として、テーマにあるように指導員（保護者も）がみんないかに子どもの気持ちに気づけるようになりたいと思っているか、子どもの気持ちに寄り添いたい思いは大きく、そして力をつけたいという向上心のあらわれだと思えました。子どもの気持ちに気づくことは、意識していても難しさを感じる毎日です。そもそも自分の気持ちに気づくのも難しいこともあるわけで、まず保護者が今置かれている状況や社会背景から学び直しました。

先生からは“心に余裕を”というワードが何回も繰り返し出てきていました。指導員の心に余裕がないと、言動の奥にある保護者や子どもたちの気持ちに気づくのは難しくなってしまう。背景に目を向けると厳しい状況が見えてくるはずなのに、上辺だけを捉えて終わってしまうことになりかねません。先生の話から、そのためにはまず指導員がおおらかな気持ちを持つことが大切で、プレッシャーから解放された場やほっと出来る場などが必要であるということでした。自分自身もそういった機会や場が作れるよう努力していこうと思えました。

普段特に気を付けていることは、一見問題のない子どもと言われる子どもの静かな訴えも気づけるように意識することです。正直、簡単ではなく反省の日々ですが、あたたかく思う気持ちは絶対に伝わり信じて保育しています。自分は、普段の何気ない会話やゆったりとした雰囲気がとても大切だと思いつつ、子どもたちと日々接しているのですが、杉田先生自身の雰囲気や話し方そのものがほっと出来たり、学童保育においても学ぶ言動の事例がたくさんありました。大学の教授ということもあり現役の大学生の事例がいくつもありませんでしたが、そこには小学生の時の過ごしてきた環境や育ちが深く関係していることがよく分かりました。

学童保育所は毎日一緒に過ごす人間対人間。指導員が心に余裕を持ってゆったりと接していくことの重要性を感じました。慌てず、楽しむことの大切さも学びました。いつもの研修とは少し違った視点から心の奥にあるものを考える内容が多く、今の私自身にとって大変勉強になりました。

【石川 裕介（つくしくラブ 非常勤指導員）】

言葉を使って説明するのが苦手なのは低学年だの児童だけだと思いつていましたが、高学年の児童は言葉を選べるようになるだけ、思うように話すことはできないという先生の意見はまさに目からウロコでした。また児童がトラブルを起こした際、指導員の気持ちとしては何があったのか聞きたいので「何があったの?」と聞いてしまいがちですが、子どもの気持ちに寄り添うような言葉かけ、例えば「大丈夫?イライラするのかな。」などしてあげると徐々に気持ちがほぐれてきて、話を話してくれるようになるという先生の体験談もとてもためになりました。僕もこれからのことを肝に銘じて、いろいろ試していきたいと思えます。

【岩井 里真（たけのこクラブ 常勤専任指導員）】

1日目の全体会では、学童の始まりからその背景やその時の時代の流れなど知らない時代のお話を聞くことができ、少しではあるが学童の成り立ちや意味を知ることができた。また、コロナ禍での学童の生活、大きな災害時の被災地での子どもたちの思いやその心のケアをしながらの保育など想像できない面の実体験による話を聞いたことにより、更に保護者にとっても子ども達にとっても学童の重要性、大切さを知ることができた。涙ながらに話される姿は印象的で、被災地全体が大変なのはもちろんだが、非日常的な災害やウイルス蔓延等が起こった際、保育所、学校関係や学童等子どもに関わる全ての機関の方が自分自身以外の心身のケアをしていくためにも、自分自身がしっかりとしていなくてはいけなく本当に大変な責任のある仕事だと改めて感じた。

2日目の分科会では、講師の佐藤先生の学童での一年の流れを写真と共に見ることができ、学童指導員歴数カ月の私にとっては1年の全体の流れが少しつかめる機会となった。この様に他の学童保育所について知る機会が少ないため事例や写真等ある研修はとても分かりやすかった。

そして、学童に通う子どもたちにとって学童は“第二の家”であり「ただいま」と言って「おかえり」と笑顔で迎えてもらう安心感や、学童に帰って何をしようか楽しみできる安全な生活が保障される場所でなければいけないことが分かった。この分科会では、運営指針に載っている事と重なる部分も多く、“学童保育をしていくにあたって大切なこと”は何度もしかり学び理解する必要があると思った。

【花田 幸奈（あおぞらクラブ 非常勤指導員）】

今回初めて、「全国学童保育研究集会」に参加させていただきました。

まず、1日目の全体会の中で印象に残ったことは「学童保育でどのような毎日をつくるのかを指導員が一方的に決めるのではなく、一緒に過ごす子どもと保護者とともに考え、状況の変化に合わせた生活をつくっていくことが大切だと感じています」という東京都の小野さとみさんの実践記録でのお言葉です。コロナに対する子どもたちの考えは様々で、1つに約束を統一することは難しいですが、それでもみんなで話し合って決めるのか、指導員が決めるのかでは意味が異なると思いました。

2日目の第12分科会では、「常勤がいること」というのは、私は当たり前のように感じてしまっていたけれど、過去には「常勤がない現場」が存在していたということに驚きました。また、「指導員の入れ替わりが減ることで子どもが安定してくる」というお話では、過去を振り返ってみると共感できる部分が多く、指導員が激しく入れ替わっていた時期には子どもが不安定になっていたことを思い出しました。

また、今回は運営の立場だったため、グループワークには参加しませんでした。6つのグループの発表を聞き、考えていかなければいけないことは子どもたちのことだけでなく、働く側の体制を整えていくことにもあるのだと思いました。私も女性の1人として、結婚出産を乗り越えて長く働き続けることができる職場に学童保育所がなってくれれば嬉しいなと感じます。

【伴 裕佳（あそびばクラブ 非常勤指導員）】

コロナ禍になってから、学校に行けなかったり、遊びが制限されてストレスが蓄積していつか様子がおかしいのはあそびばクラブでも見られていて、「早く学校に行きたいな」「何で外に遊びに行けないの？」などよく耳にしたのを印象強くおぼえています。得丸先生の高学年の子ども達の作文を聞いて、普段はめんどくさかった学校や勉強に対しての不安が出てきたり、友達と久しぶりに会って、遊べる嬉しい気持ちなど今までと違った環境に対して変化した気持ちとそれからなるストレスなども感じるようになりました。コロナ禍だけでなく制限された中で高学年だから出来る事や楽しめる事を探すと、子ども達と一緒に考えていく事も大切かなと思いました。

午後の子どもの気持ちに気づくについては、「困った子は困っている子」といったその子や、親の背景に目を向けてどうして問題をおこしてしまうのかの根元を考えること、何か困っていることがあるゆえの行動ではないか考える事の大切さを感じました。まず、大人が自分の置かれた状況を共有しねぎらえられるような困ったなと思うことを楽に話せる場がある事で大人が子どもへ伝える事も変わってくるのかなと思いました。ただだんに問題を起こす、勉強が出きない、どうしよう...ではなく、何を思っているのか、困っている事、家の人の困っていることはないかなど考えていく事も大事だなと思いました。また、いわゆる「いい子」について、いい子だから大丈夫ではなく、思った気持ちを言えたり、甘える、わがまを言えるような存在になればと思いました。自主的に、言いたい事を言ってもらえたり、困っている事を察してあげられる様にさせられる様にしていきたいと思いました。

その他の常勤専任指導員、非常勤指導員、臨時雇用指導員のレポートは当会ホームページに掲載しておりますのでそちらも是非ご覧ください。